

射術溫故之卷

四

一貫傳射術温故之卷之四

矢之部

○箭起源

一貫曰夫於我國矢起源ヲ探ルニ古事紀和銅五年

位上太朝臣天照大神聞驚而詔我那勢命之上來安萬侶撰

由者必不善心欲奪我國耳郎解御髮纏御美豆羅

而乃於左右御美豆羅亦於御髮亦於左右御手各

纏持八尺勾璫之五百津之美須麻流之珠而自美流

四字以音曾毗良迹者負千入之鞞訓入云能理下  
下效此

以音 比良迹者附五百入之鞞亦取佩伊都此二字之

竹鞞タカトモ而弓腹振立ユハツフリクテ而堅庭者カタニハヲハ於向股ムカモ、フミ蹈那豆美ナツミ三字以音

如沫雪アハケ蹶散ケチラカシテ而伊都イツ二字之男建ヲタケブ多タカ祁夫チ蹈建フミタケリ而待ツ

ト云云如此鞞鞞ナドノ弓器ノ類出タレハ矢ト

云物ノ備事ルレ勿論ナラン且下文ニ鳴鏑箭生弓矢

天之波波矢天之如久矢天之真鹿兒矢三指四指

ナドイフモノ見タレバ神代トヤラン云時都而

弓器ノ類備タレバ是ヲ以テ其濫觴トセンニハ

不如シカ勿論日本書紀一品舍人親王從四位下勳五

以後 文 武 天 皇 以 前 或 云 二 出 夕 尔 攸 毛 素 戔 鳴  
養 老 四 年 五 月 二 十 一 日 奏

尊昇<sup>シ</sup>天之時卜云条二天照大神素知其神暴惡至<sup>モトヨリ</sup>

聞來指之狀乃勃然而驚曰吾第之來豈以善意乎

謂當有奪國之志歟夫父母既任諸子各有其境如<sup>ヲモフニ</sup>

何棄置當就之國而敢窺窬此處乎乃結髮爲髻縛

裳爲袴便以八坂瓊之五百箇御統<sup>ノスマルヲ</sup>御統<sup>ヲ</sup>此云纏其

髻鬢及腕又背負千箭之鞞<sup>千箭此云</sup>與五百箭之

鞞臂著稜威高鞞<sup>綾威此</sup>振起弓彌急振劔柄踏堅

庭而蹈股若竦雪以蹙散<sup>蹙散此云俱稜</sup>奮稜威之

雄詰<sup>ヲタケヒ</sup>雄詰<sup>此云</sup>發稜威之噴讓<sup>コソレ</sup>噴讓<sup>此云</sup>而徑詰問

焉卜云云一書曰日神本知素戔嗚尊有武健陵物

之意及其上至便謂第所以來者非是善意必當奪  
我天原乃設大夫武備躬帶十握劔九握劔八握劔  
又背上負鞞又臂著稜威高鞞手握弓箭親迎防禦  
ト云云此外天之波波矢。反矢。天真鹿兒矢八目鳴  
鏑ナド見ヘタリサレバ是等ノ物神代ニ見ヘタ  
ル事古事紀ニ不異ト知ヘシ近世弓家者流ニ弓  
矢ノ起源ヲ妄作シテ種々ノ異説ヲ設ヌレトモ  
正義ニアラサレハ取ニ不足右古事紀日本書紀  
ノ二書撰セラレタル事和銅養老ニ備リタレバ  
既ニ其頃弓矢弓器ノ類專ラ行レタル事明然タ

リ和銅八人皇四十三代元明天皇ノ年号也養老  
ハ四十四代元正天皇ノ年号ナリ既ニ此時此器  
ノ存在セル事ヲ正義トスヘシ尚右二書二人皇  
ヲ記セシ攸ノ弓矢ノ類此處彼處ニ見ヘケレト  
モ是ヲ揚ルニ違アラズ彼是矢之部ヲ注スル條  
ニ掲ル事モ有ケレハ其條目ニテ是ヲ知ヘシ或  
人皇二代綏靖帝ニ大歳己卯冬十一月中使弓部  
稚彦造弓倭鍛部カタチ天津真浦造真麿鑱矢部作箭ト  
日本書紀ニ記アレハ矢ヲ制作スル事ノ顯然タ  
ル事ヲ知ヘシ下条鳴鏑ノ条ト互見考合スヘシ

都テ神代弓矢ノ事彼二書ヲ起源ノ正義トスル  
攸ニオイテ其人ノ器量見識ノ上ナラテハ發明  
大悟不可成思惟スヘシ

○鳴鏑矢

一貫曰此物我國ニ見タル攸古事記神代之卷其  
鼠咋持其鳴鏑出來而奉也其矢羽者其鼠子等皆  
喫也同書坐<sup>二</sup>近<sup>一</sup>淡<sup>二</sup>海<sup>一</sup>國之日<sup>ヒ</sup>枝<sup>エ</sup>山亦坐葛野之松尾  
用鳴鏑神者也同書於是兄宇迦斯以鳴鏑待射返  
其使<sup>ニ</sup>神<sup>武</sup>記<sup>アリ</sup>同書大猪出郎天皇以鳴鏑射其猪<sup>雄</sup>略  
ア<sup>紀</sup>ニ<sup>リ</sup>日本書紀神代之卷副持八目鳴鏑同書天智

紀日本救高麗軍將等泊千百濟加巴利濱而然火  
焉灰變爲<sup>レ</sup>孔<sup>ア</sup>有細響如鳴鏑<sup>カフ</sup>ト見ヘタリ其外諸記  
録軍史物語雜書等ニ鳴鏑ノ事彼處此處ニ見ヘ  
タリ是ヲ掲ルニ違アラズ下条ニ引用評註セル  
ニ粗出タリ竝可考茲ニハ鳴鏑矢ト云物神代ト  
ヤランイ、シ其一條ニ見タレハ是ヲ掲テ大ニ  
舊シトセルノ證據トス可考<sup>カシカフ</sup>

○鳴鏑名稱

一貫曰鳴鏑名稱區說アリテ多端ナリ牽合附會  
ノ妄說ハ茲ニ不掲白石先生說ニ平家物語ニハ



蕪カフラトモシルシタレハ其形ノ蕪カフラノ菁根ニ似タレハ

トテカクナヅケタルラムモシラス軍器考ニ是

所見セル攸草書ヒラ假名ノ平家物語ニハ鳴鏑

矢ノ事所々ニ出タレ氏悉ク假名書ニテ文字ヲ

不遣蕪ノ字ヲ用タルハ異本ノ平家物語ニヤ予

モレ真字カタ假名ノ平家物語ヲ見タル事アリ此

本ニハ多分ヲ用タレハ蕪ノ字ヲ書タル所モア

ルヘケン歟予ハ希見セル故ニ是ヲ不正ナリ尚

尋可 又伊勢安齋先生蔓菁根ニ似タル故カブラト

名付ト云フハ穩ニテヤスラカナル説ナリト云

云是ハ右軍器考ノ評注ニテ其或倭名類聚鈔ニ

ハ鳴ヤツメカフラ箭漢書音義云鳴鏑如今之鳴箭也日本紀私

記云八目鏑夜豆女ト見タリ或前ニモ引タル古

加布良

事紀日本紀ニ用タル文字倭名抄ニ用タル文字  
蔓菁根ナドノ文字ハ不見又白石先生説ニ我國  
ニテコレヲ加布良トナツケシ事ハイカナルイ  
ハレニヤイマダ所見アラズ但シ矢頭トイフ物  
ハ神頭ナドモカク也其矢頭ヲバ米加布良トテ  
海ニ生フル藻ノ根ニテ作レルガ本式ニテハア  
ル也ムカシ神代ノ時櫛玉八ノ神海藻ノ柄ヲ鎌  
ニシテ燧臼トシ海蓴ノ柄ヲ燧杵トシテ火ヲ鑽  
出セリトイフ事モアレバ舊事本紀此物モ、トハ米  
加布良ニテ作り出セル物也シニヨリテ。カクハ

ナヅケシニヤト云云此説ハ正義的實ニモアラ  
サルヘシイカニモカブラ矢ノ形蔓菁根ニ似タ  
ルト云ハ素直ナル一説世下鳴鏑異稱ノ条ト竝  
可考

○鳴鏑異稱

一貫曰鳴鏑異稱トハ此矢ヲ指テ墓目ト呼タル  
事モアリケリ既ニ參考保元物語半井本云爲朝  
家季ヲ招坂東ノ者ニ手ナミ見スル事ハ是ガ始  
ゾ征箭尖矢ノ物ヲ徹スハ尋ノ事也キヤツ原ヲ  
墓目ニテ射ハヤト思フハ如何左侯ナント申ス

又同記半井本ニ凡門々ニハ墓目ノ音矢叫ノ音  
隙モナシトアリ右爲朝家季ヲ招クトアルヨリ  
景義カ膝ノ節ヲ射切タルトアル一段ノ文義前  
ニ墓目ト云後ニ鳴鏑ノ射タキ事モコソトイ、  
野矢一腰尋常ニ矯ト云<sup>イテ</sup>条トアリテ鳴鏑ノ製作  
ヲ出シタルモ悉ク一物ヲ云タル文面ナリ是等  
或引目ト云或鳴鏑ト呼タルニテ一物ニシテ別  
名セシ事ヲ知ヘシ近世墓目ノ矢ト鳴鏑ノ矢ト  
正敷取分テ鏑ノナキヲ引目ト云加鏑セルヲ鳴  
鏑ト稱シテ正シク取分タリ故ニ古昔鳴鏑ヲシ

テ引目ト異稱セシ事モ見ヘサル事ニゾナリケ  
リ元來鳴鏑矢ノ加布良ハ其形蔓菁根ニ似タル  
ヲ以テ名呼スレハ其形ニテ稱呼セル號也飛喜  
女トハ其鳴音ヲ以テ稱呼セル號也彼爲朝家季  
ヲ招テ征箭尖矢ノ者イア、ヲ徹スハ常ノ事也キヤツ  
原ヲ蔓目ニテ射バヤト竝云シハ鏃ヲスゲタル  
物ニアラザレバ竝云マジキ事也コト可考都而是而  
己ニ不限一物別名異物同名ノ品類例アリ尚引  
目矢ノ條ト互見考合スヘシ其呼音ヲ以テ稱呼  
セル事蔓目ノ条ニテ分明也

○鳴鏑矢古物

一貫曰前ニモ如述鳴鏑矢ノ形蔓菁根ニ似タル  
ヲ以テ其名稱トセン也既ニ官准軍器考圖式ニ  
模シタル攸摂品天王寺蔵上宮太子ノ鳴鏑矢ナ  
ルモ才其形蔓菁根ニ彷彿タリ或南都正倉院御  
蔵物圖矢トアル中鳴鏑矢ニ筋模セリ軍器考本文ニハ東  
大寺正倉院ニ在攸ノ聖武天皇御鳴鏑矢ニ節アリト記セル是ナリ是ハ其形蔓菁  
根ニハ異ニシテ全圓ニ見ユ是蔓菁根ノ形ノ轉  
作セルモノ歟或同書和品大安寺八幡宮蔵神功  
皇后御矢トアル物ノ中全圓ニシテ無目ナル鳴

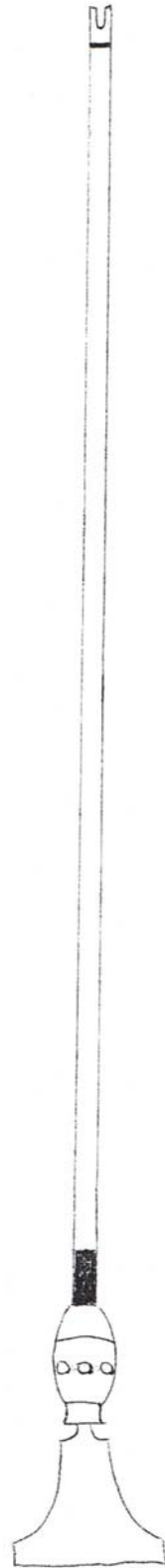
鏑矢一筋アリ遡軍器考本文ニモ大安寺ノ神實  
神功皇后ノ御矢ト云物ニ其形ハ鳴鏑ノ如クニ  
シテ目サ、又ヲ角ニテ作ラレシ一筋アリキト  
記レシ是也予按ルニ角ニモセヨ木ニモアレ無  
有ケント山孤先生ニモ 我弓術師  
大口子積 尋問セシニ是  
ハ後世ニ神頭ト云物有ニ等シ目ヲ不打シテ鏑  
ヲ加ヘタルハ彼神頭ニ鏑ヲ加ヘタランニハ其  
用相同シカラン近世ノ水鳥ニ所用セル久留利  
矢是ニ彷彿タリ其用ル攸ニ因テハ其矢モ異リ

古昔モ今モ人情不可変克々可考當流ノ目無鳴  
鏑トテ尋常ノ鳴鏑ニ反シテ用ル事有ト教ゼラ  
レシ何様其證ハ鬼モアレ鳴鏑矢ナルモノ、形  
古昔ニ見タルモノ今ニ存セル事奇也ト云ヘシ  
案ニ上宮太子在世ノ頃此太子ハ用明天皇第一  
ノ皇子ニテ三十一代敏達天皇元年ニ生レタマ  
ウトナリ或厩戸皇子或上宮太子或八耳皇子又  
聖徳太子トモ稱シ奉ル叡睿明大智ト聞ユ此太子  
ノ御物トアレハ其年曆ヲ考ルニ凡千二百四十  
二年ニ成ル又聖武天皇神龜元年ヨリ凡千九十

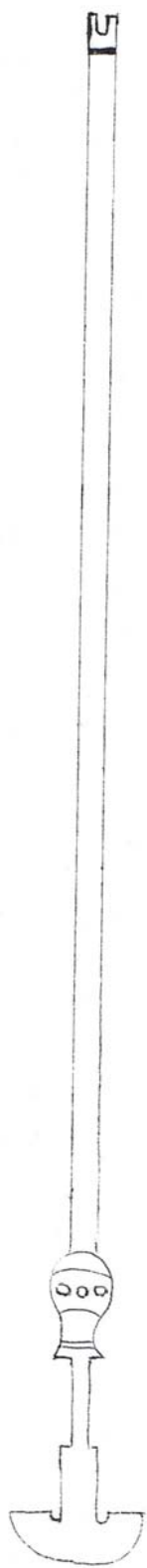


年ニ成ル亦神功皇后元年ヨリ凡千六百十三年  
ニ成ルサレバ其奮キ事ヲ可考左ニ其圖ヲ寫シ  
又

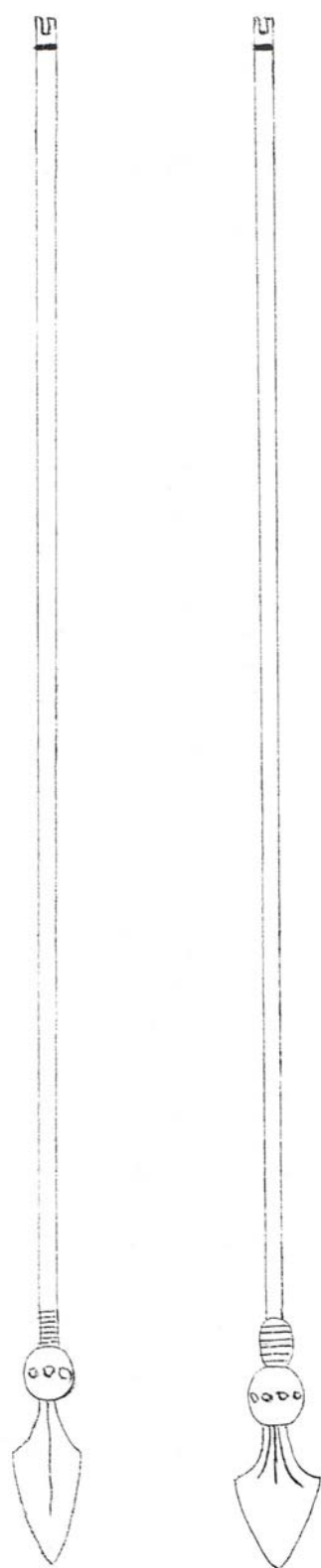
攝弼天王寺蔵上宮太子鳴鏑



和州法隆寺蔵聖徳太子矢



南都正倉院御藏實物圖矢



○鳴鏑矢近世

一貫曰鳴鏑矢ト云物神代ト云モノヨリシテ累イテ、

代用ヒ來テ近世鳴鏑ノ所見ナルヲ模寫スルニ

不及トモ前ニ鳴鏑矢ノ古物ナルモノ、圖ヲ出

シタレハ是ニ對シ左ニ其圖ヲ出ス其摸スル攸

ヲ以テ古今ノ異別有事ヲ可察但其形ハ異ナリ

トイヘトモ其用ハ古今相同シ先其圖スル攸弓

法私書年号月日記者不知弓矢名所記宝徳元年

笠原持長入道淨元記之用害記永祿八年川村狩詞記寛正五

月日多賀豊後守弘治二年六月武田高忠判トアリ伊豆守信豊記之等

ノ五部ノ書ニ出タル攸ヲ左ニ摸寫シ又或矢本

秘傳武田信豊記之小笠原家書ニ出タル鳴鏑ノ圖ヲモ

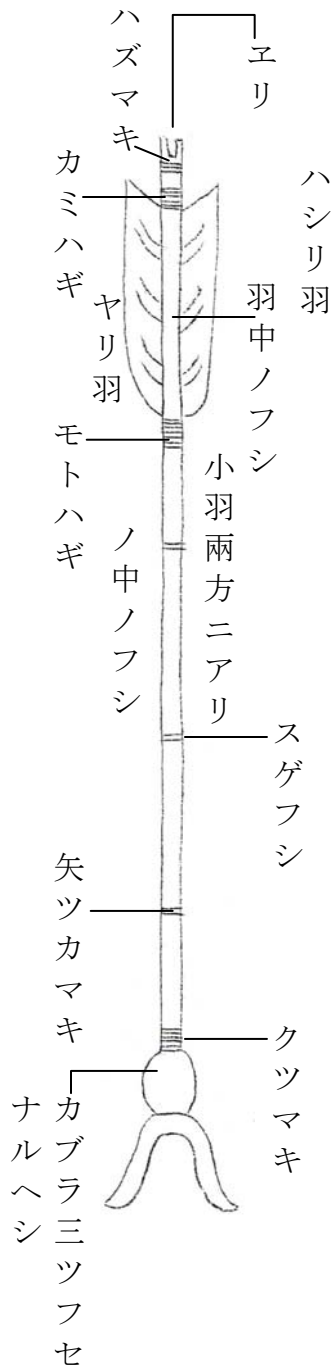
出シタリ竝可考其外射御拾遺抄射御持長記岡

本記高忠聞書鬮的聞書高忠聞書別記弓馬故實

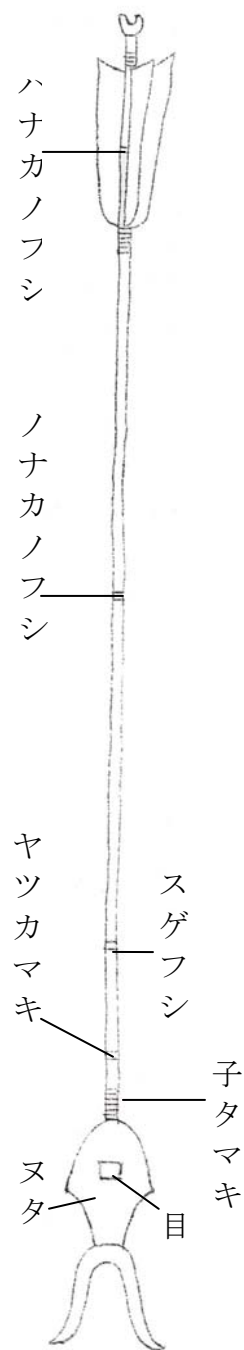
射手方聞書上賢抄諸書當用抄ナドノ小笠原流

ノ書ニハ鳴鏑ノ事所々見ヘタレ凡其圖不見モ  
 ノハ是ヲ畧ス或我師家ニ取傳タル攸ノ鳴鏑矢  
 ノ圖モ此尻ニ追副セリ彼是併考ヘシ

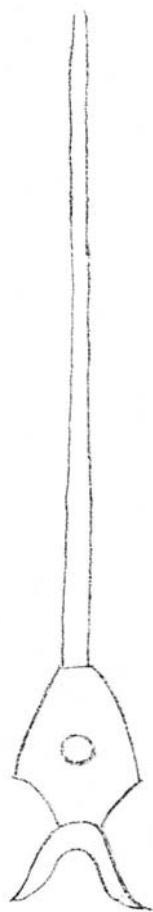
弓法私書圖



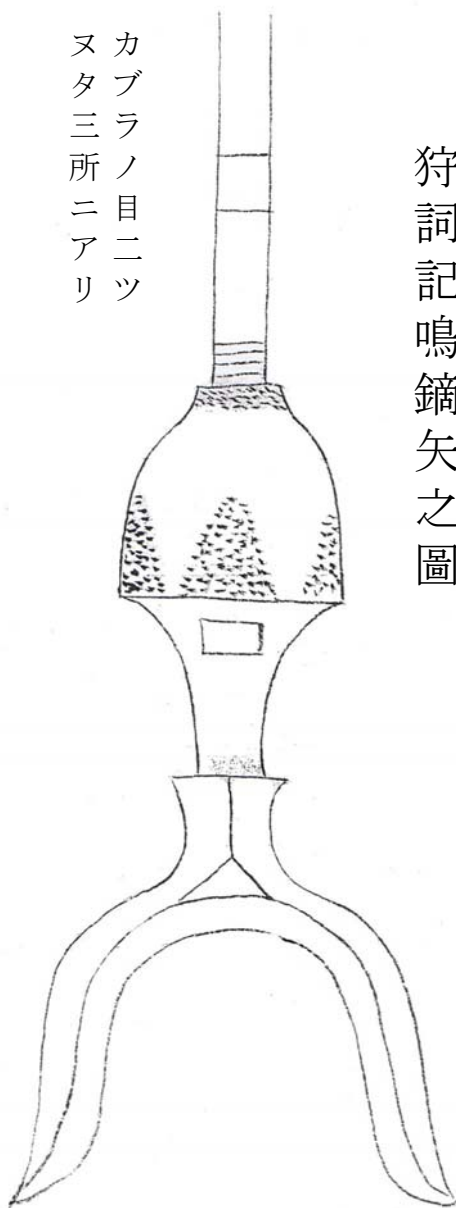
弓矢名所之記



用害記鳴鏑矢之圖

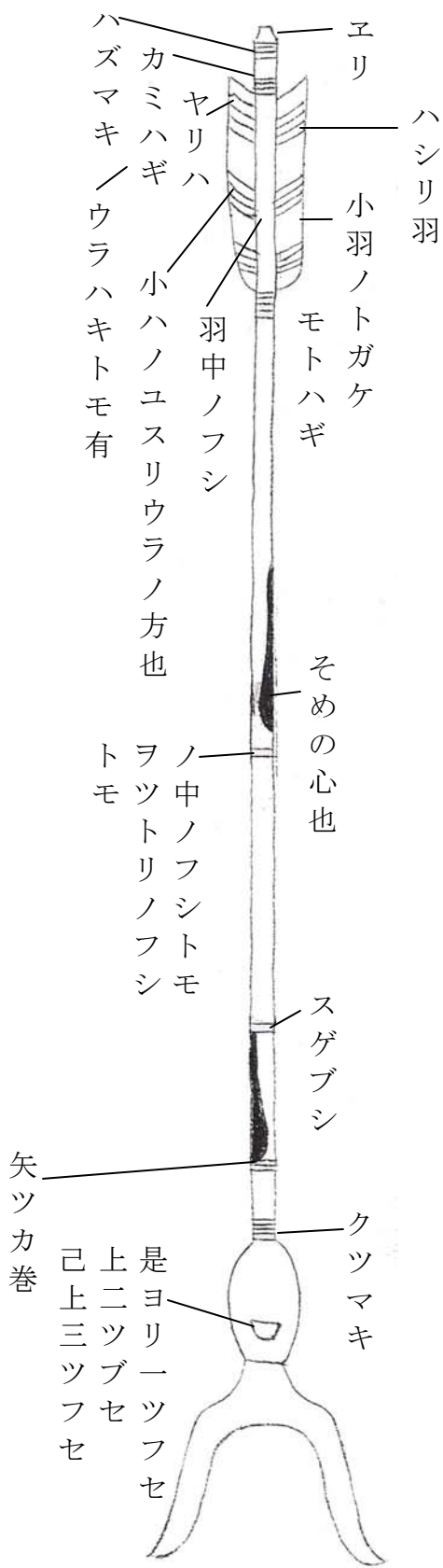


狩詞記鳴鏑矢之圖



カブラノ目ニツ  
ヌタ三所ニアリ

弓馬三冊鳴鏑矢之圖



ハシリ羽

小羽ノトガケ

モトハギ

そめの心也

スゲブシ

クツマキ

エリ  
カミハギ  
ヤリハ  
ハズマキ  
ウラハキトモ有  
小ハノユスリウラノ方也

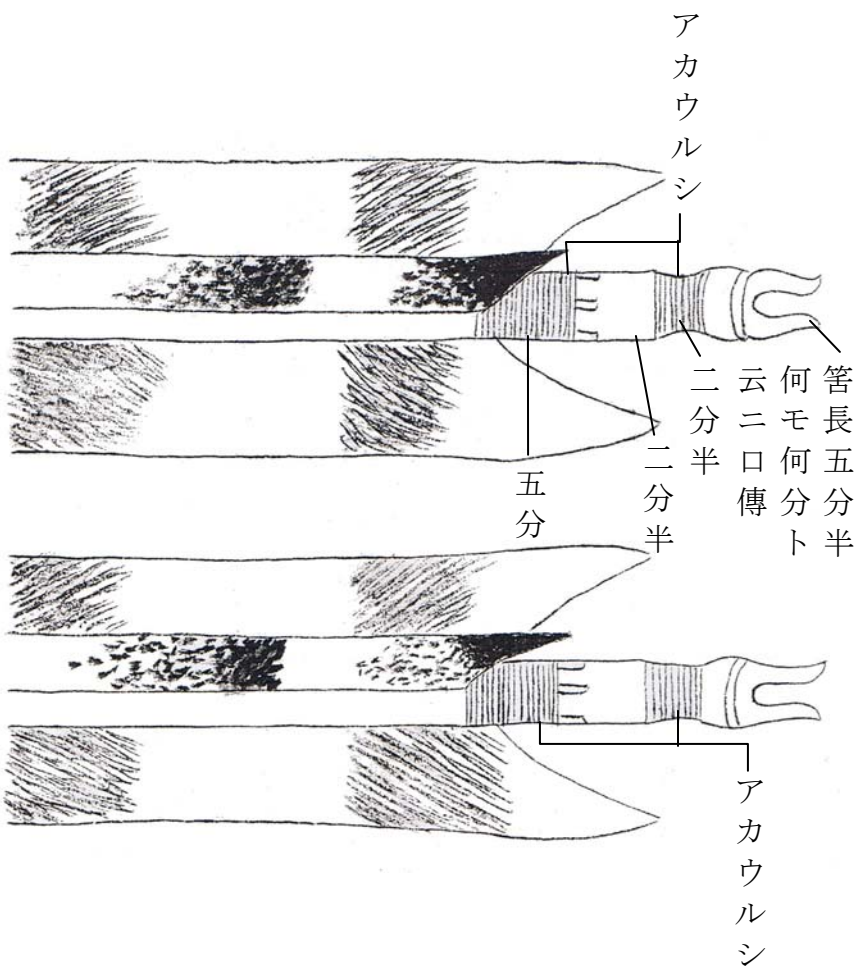
ノ中ノフシトモ  
ヲツトリノフシ  
トモ

矢ツカ卷

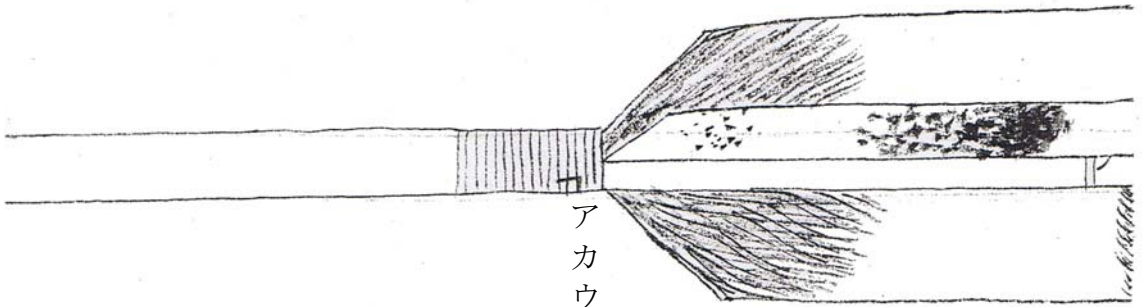
是ヨリーツフセ  
上ニツブセ  
己上三ツフセ

# 矢本秘傳蕪矢之圖

蕪矢

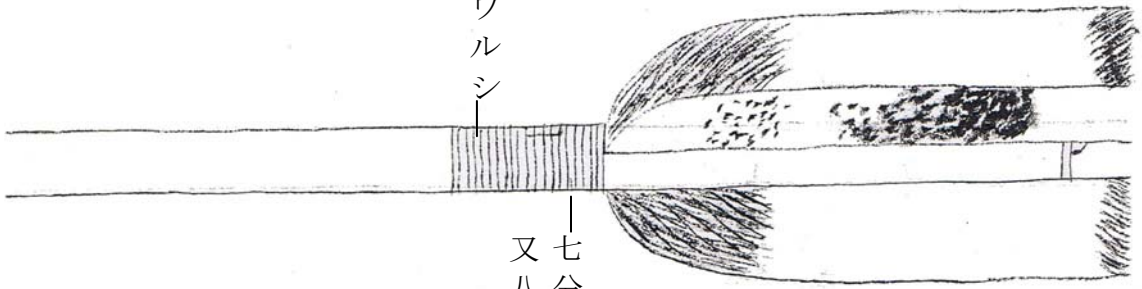


蕪矢



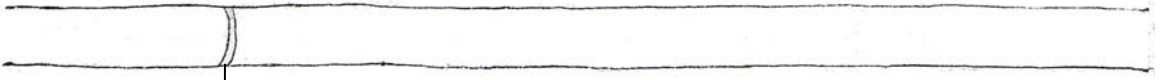
アカウルシ

アカウルシ



七分半  
又八分ニモ  
口傳





一 筵  
寸 廻  
計

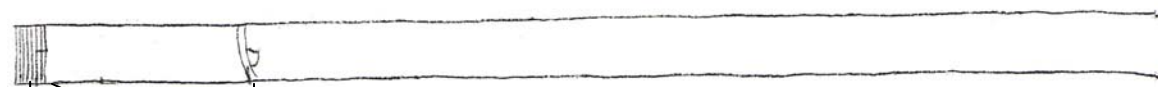
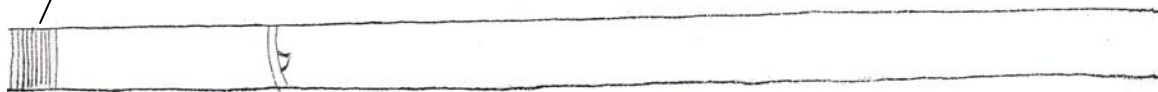
---

---

---

---

アカウルシ



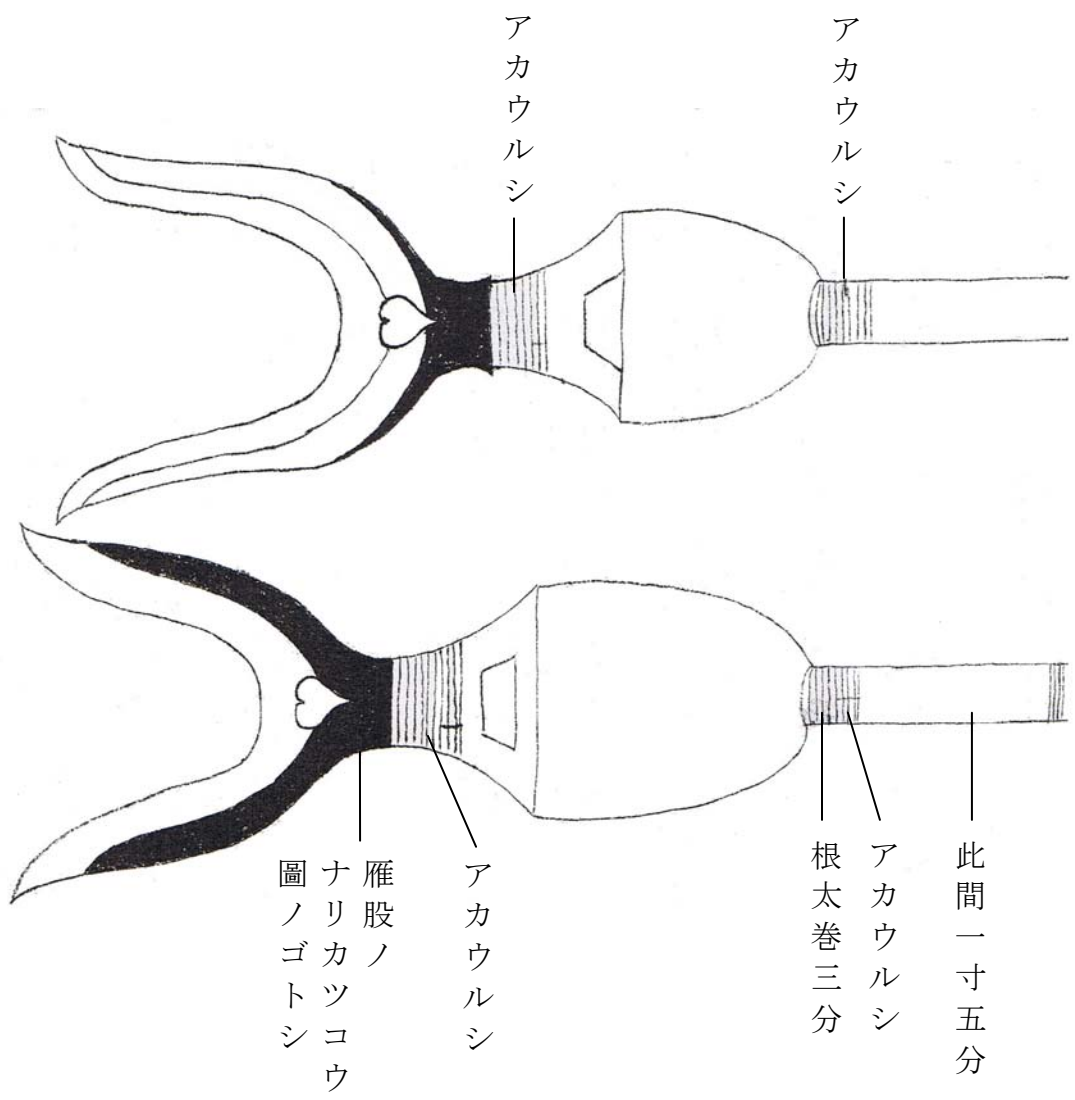
矢束巻ト云二分ハカリ三分ニモ

アカウルシ

三寸六分モ可有

二寸五分又二寸八分

スケ節蕪スゲキワヨリ



政在曰右本文ニ或矢本秘傳小笠原家書  
ニ出タル鳴鏑ノ圖或我師家ニ取傳タル  
云云トアリテ其圖見ヘス前ニモ述ル如  
ク此書モ草稿ニシテ全カラズ不幸ニシ  
テ吾師モ館ヲ指ラレ今ニ至テハ就テ正  
スヘキ人ナシ既ニ右矢本秘傳蕪矢ノ圖  
ハ本文ニ據テ追加シタレ凡其製作ノ事  
ハ下条ニ述ラレタレハ載セズ餘ノ圖ハ  
何レノ書ナルヤ不詳且近世蕪矢ノ圖モ  
數品右ニ出タレハ此ニテ盡セリト云ヘ

シ予ガ見タル所芝藩隨書或ハ橘家墓目  
口傳秘等ニ圖ヲ出シタレ凡大同小異ニ  
シテ右數品ノ外ニ出ズ又引目鐘内封之卷  
ト云ヘル書附會ノ妄說ヲ立テ 異製  
モアリケレ凡取用ベキ書ニモアラザレ  
バ爰ニ畧ス餘ハ推テ知ヘシ

○鳴鏑矢孔穴

一貫曰軍器考補注ニ目ハ穴ノ事也西土ニテモ  
穴ノ事ヲ眼ト云同意也天工開物卷ノ下佳兵篇  
弧矢章ニ曰響箭ハ則寸木ヲ以テ空中錐目爲竅矢

過招風飛鳴郎莊子所謂嚆矢也云云響箭ハ此方  
 ノカブラ矢ノ類也眼ハ目也則アナノ事ヲ云ト  
 記アリサレハ鏑ニ目ヲ穿ツ事ハ其鳴響ナル事  
 ヲ利用トシテ製セシ事ナリ既ニ日本書紀神代  
 ノ卷干時大伴連遠祖天忍日命帥來目部遠祖天  
 穗津大來目背負天盤鞞臂著稜威高鞞手捉天扼  
 弓天羽羽矢及副持八目鳴鏑區說些シナラス臆  
 ニ日本書紀文面ノ僂徒ニ其目ヲ穿ツ事ハ目ト  
 ミテ安ラケキ事ナリ其意下ニテ見ルハ或ハ  
 安濟先生曰八目鏑是ヲ八ツ目トヨムハ誤也ヤ  
 メトヨムヘシ八百八十八氏人八雲八重垣八坂  
 櫻八尋殿ノ類皆八ヲヤトヨミテヤツトハヨマ  
 ス荷田在満カ説ニ八ノ訓ヤヲ借テ弥ノ義ニ用

生事ナ穿敷文セニ響八増弥シクテ數詞ヤ此ユ  
ノニルチ説意ル安キハ長ノ勿終云ニ也ト説實  
如於卓タヲ其事濟渡其無義也賀ナハル目ムタ弥  
キテ見ル論見ニ先リ弓量也ト茂クハ事鏑ヲリナ  
明何ノ鳴辨識テ生又勢ルノト此真無ハ勿ハ畧トル  
哲ノ議鏑ス專甚并ルノト廣云說淵窮初レ唯シ云ヲ  
ノ用説トルヲ義敷我ト師ルナハリハノト國多ト八訓  
説ニヲ立ルニ居ヘ共シニ都其テ義慣響八ハイ此除キ鏑ハ事ヲ  
八モ立テ迄ニリスルニ因テ代ヲ立テリ八鳴く上ム初八事也窮ハ云  
目立テ感ニレ居ヘ共シニ都其テ義慣響八ハイ此除キ鏑ハ事ヲ  
鏑又感ニレ居ヘ共シニ都其テ義慣響八ハイ此除キ鏑ハ事ヲ  
ハ事服テ可唯ルニ目因テ代ヲ立テリ八鳴く上ム初八事也窮ハ云  
唯也シタナハ目因テ代ヲ立テリ八鳴く上ム初八事也窮ハ云  
目克タナハ目因テ代ヲ立テリ八鳴く上ム初八事也窮ハ云  
ヲ々リラハテ代ヲ立テリ八鳴く上ム初八事也窮ハ云  
多可トンハ蒐ヲイテ論按隅鏑ニ畧ツモヲ以八ノイリ  
ク考モ假弓令ツ目六ケル辨ルニノテ也カナ以八ノイリ  
開安濟矢イカヲケル辨ルニノテ也カナ以八ノイリ  
ル先ノカヲケル辨ルニノテ也カナ以八ノイリ



鏑ト云事也八ノ數ニ拘ル事勿レト云ルハ蹈脱  
タル説ナリ可称但シ左イワシヨリ唯八ツ目ヲ  
穿タルトシテ何説ヲモ不立コソ素直倭名類聚  
ナラメヤ可考猶下条トモ互見スヘシ  
抄ニ漢書音儀曰鳴鏑如今之鏑箭也日本紀私紀  
云八目鏑夜豆女加布羅ト見ヘタリ或ハ源平盛衰記石  
橋合戰篇ニ三千餘騎聲ヲ調ソロヘテ時ヲ造ル佐殿モ  
同時ヲ合テ鳴矢ヤツメカフラヲ射通シケレハ山神合テ敵モ  
味方モ大勢トコソ聞エケレトアリ臆ニ此書鳴  
矢ノ二字ニヤツメカフラト假名付ケシタルハ正  
義ニハ非ス鳴鏑矢ニ目ヲサス事八目ヲ以テ本  
式ナド云事ト心得テ此カナヲ當タルナラン勿

論鳴矢ト書タルハ鳴鏑矢ノ事ニ必セリ目ノ數  
知ス是彼心得ニテ假名付シタルニ非スヤ可考  
或ハ射御拾遺抄ニ根本鳴鏑ハ八目射御持長記  
根本ハ八目高忠聞書根本ハ八目弓法私書根本  
鳴鏑ハ八目美人草ニ根本ハ八目ト見ヘタレハ  
小笠原家ノ書ニ見ヘタル所モ彼八目ヲ以テ本  
數トシタルナリ是神代ノ卷日本書紀八目鳴鏑矢出  
タル事其原始徒是ニ據ルモノナルヘシ但シ鳴  
鏑ニ目ヲサス事愚臆ニ定數ナトアルニ非ス元  
來ハ射手ノ器量次第ニテ鳴鏑ノ大小アリ此鳴鏑大

小ノ事射手ノ器量次第ト云ニ意味アリ其人ヲ  
シテ面授ナラサレハ會得ナリカタシ理學ニア  
ラズ實既ニ日本書紀ニ出タル処ハ八目鳴鏑ト  
事ナリ  
アレ氏官准軍器考ニ記セシ上宮太子ノ鳴鏑矢  
ニハ目六ト七トサ、レタリ聖武天皇ノ御天ニ  
ハ其目八ト六トサ、レタルナリトアリ或ハ參  
考保元物語白河殿攻落篇八郎爲朝大庭量義ヲ  
射ル条ニ鳴鏑矢ニテ射ハヤト思ヒテ目九ツサ  
シタル鳴鏑矢ノ由ハ見ユ或ハ前ニ記シタル小  
笠原家流ノ書根本鳴鏑矢ハ八目其後二日本也

射御拾遺抄  
射御持長記  
或ハ根本ハ八目其後ハ五目四目三

目二目ニモクリタル也今ハ二目ヲ本トスル也

高忠  
聞書

或ハ五目三日ニモアルヘシ根本鳴鏑ハ八

目其後二日本也

弓法  
私書

或ハ美人草ニ根本ハ八目

其後ハ五目四日三日ニモクリタル也ナド、記

アリテ更ニ其目數定タル事ナシ彼書類ニ根本

八目其後ト書タル其後ハ彼神代ノ八目鳴鏑ヲ

心ニコメテ書タル故ニ其後ノ二字ヲ入タルナ

ラン是等皆神代ノ八目鳴鏑ト云物ニ凝附テ此

鳴鏑矢ヲ大悟發明スル事ナラズ徒ラニ爰ニ因

依シタル者ナルヘシ目數ハ鳴鏑ノ大小ニ順ト

云所ノ實事ヲ大悟スレハ八目鳴鏑ニ區説ヲ立  
ル事モイラサル也鳴鏑大小目數等其相應スル  
所ハ下鳴鏑製作ノ条ニ述タリ互見合考シテ其  
實用ヲ達ヘキモノナリ

○鳴鏑矢製作

一貫曰鳴鏑矢ノ事ハ前ニモ云ル如ク日本書紀  
神代ノ卷ニ見ヘテ其奮キ事云ヘキモ非ス其鳴  
鏑ヲスケンカラハ其篋其筈其羽有ン事ハ云ニ  
及サル也其製古ヲ見ン事ナラサル事ニテ漸ク官  
准軍器考圖式ニ摸シタル処ノ上宮太子ノ鳴鏑

矢聖徳太子ノ鳴鏑矢南都正倉院蔵物鳴鏑矢ナ  
ト云物其形ハ見ヘケレ凡其製作無之故ニ委細  
ナラス論スヘキ様ナシ其外古軍記古物語等ニ  
出タル處モ其製ノ一端ナル所ハ見ヘサルニ非  
レ凡細精ナラス予短學管見ニシテ其詳ナル事  
ヲ得サレハ何ト云ン様ナシ但参考保元物語鎮西八郎爲朝ノ鳴鏑  
矢其製粗見ヘサルニ非ス臆ニ是ハ獵ニシテ精製ノ鳴鏑矢ニ非ス故ニ下条ニ出ス互見スヘシ  
正敷其製ノ見ヘタル所ニ因依セル事ハ小笠  
原武田兩家ノ書冊ニ出タルヲ以テ據リトセン  
ニハ不如故ニ武田信豊ノ記ニ出タル所ノ鳴鏑

矢ノ製ヲ始トシテ小笠原家流ノ諸説ニ出タル  
所ヲ左ニ記ス互見考合取捨スヘシ或ハ予カ師  
家ノ傳愚意ノ趣モ添附セリ是又互見スヘシ武  
田信豊ノ記ニ曰矢本秘傳  
ト稱ス是ハ鏑矢也篋ハ白篋  
箬ハ節箬也イクフシ篋トハ不定節ハ羽中ヲ可  
賞但シ當流ハ大方三節篋ヲ用也篋ノ大小ハ鏑  
ニヨリ又射手ノ弓勢次第也可矯ヤウハ四立也  
走羽ヤリ羽鷹ノ羽小羽ハ山鳥ノ尾也羽長サ四  
寸二分也片手糸ニテハギ赤ウルシニヌルヘシ  
鏑一ノ時ハ内向外向不定但シ外向ヲ可用是陽

也此外向トハ矢ニハキテノ外向也一手ノトキ  
ハ内向外向兩様タルヘシ走羽外向ナレハ小羽  
モ外向也小羽ヲモ走羽ノコトク上ハキ迄トヲ  
スヘシ羽中ニテ小羽ヲトムル事當流ニハ用サ  
ル也矢束ノ事定法ナシ我躰相應ニスヘシ但シ  
我矢束ヨリ二伏ホド長クシテ我矢束ノ所ニ矢  
束卷トテ二三分ホト片糸ニテ卷赤ウルシヲサ  
スヘシ如斯スル事鏑箭ニカギリタル事也每矢  
アルマシキ也尤鏑ノスゲキハニハ根太卷ヲス  
ヘシ其ホトライハ雁股カフラノ根太卷ノハン



ブンタルベシ鏑ノアラニ節影ヲモ取ヌクヒ篋  
ナトニモスル也是ハ略義也又カブラノカラヲ  
真鳥羽ニテハギ小羽ニ雉ノ尾ヲ用ル事モ有是  
モ畧義也當流ノ鏑矢ハ鷹山鳥ノ羽白篋三節ニ  
シテカブラハ鹿角也是本式也鏑作ヤウ如繪圖  
長サ三伏也目ハ二ツ鹿角ニテクリ三方ニヌタ  
ヲ殘スヌタトハ角ノイボク也鏑ノ目昔ハ八目  
其後五目四目三日也今トテモ如此モアルヘシ  
當世ハ大方陰陽二儀ヲ表シテ二ツヲ用カト云  
云又傍注曰神事流鏑馬ノ鏑矢ハカブラヲ朴木

ニテ可作ハキヤウハ如常又常ノカブラヲヒイ

ラギニテ可作水牛牛角ナトニテ作ル事略儀也亦

軍陣之時矢入ナトニハ勝ぬるで軍木ヲモ用也ト記ア

リ一貫曰武田家ハ甲斐源氏ニテ武田逸見小笠

馬ノ故實家ト世ニ稱ス就中小笠原家ハ足利家

代ニ行レタル家柄ニテ格別トスヘシ但シ其三

家書風何レモ大少異ナリト知ヘシ先テ知ラ

ヲ矢本秘傳ト題スル事是其書風題号ニテ知ラ

レタリ矢本トナリハ矢ノ根元手本ト云心ニテ本ノ

字ヲ入タルナリ秘傳トハ他家ニハ無之此流ヲ

元來トスルハ云自慢也或ハ此鳴鏑ノ文字蕪

形ニ似タルハ此文字ヲ入タル也其出所ハ白石

先トノ平家物語ニ記セルト有是也或ハ篋ハ白

タ篋トハ外ニテ素直ナルヲ云ナリ炙篋サシ懸シ塗篋等

節 非 ト テ ス ニ 觀 共 矢 ニ 所 メ 只 彼 ニ ニ 其 白 サ ニ  
計 ス ハ 餘 揃 テ 美 ニ 等 一 ノ 一 一 家 ハ 非 實 篋 ル 封  
ヲ 是 ハ 云 ノ 事 モ ヲ 好 ヲ 其 ヲ 静 ヲ 本 離 鳴 節 二 依 ス 事 ト 云 シ  
揃 ヘ 彼 モ 是 ハ 有 甚 多 ム ノ 有 ル タ モ 一 矢 揃 ヘ 矢 ノ 說 ノ 竹 根 節 ハ 云 テ  
篋 中 ノ 柄 無 據 所 敷 ナ カ テ 如 斯 製 ス ル 揃 手 ナ 云 也 是 知 此 條 二 有 初  
ノ 節 風 情 事 ニ テ 何 事 ヲ 羽 羽 ノ 然 ル 驕 シ テ 四 節 的 故  
計 ヲ 也 或 ハ 矢 ニ モ 成 ル 事 ニ 可 賞 揃 ヲ 殘 ラ 矢 テ  
揃 ヘ ナ ト シ テ 左 法 ガ

ハ慣大ノク也第家シリ爰筈テ也ハ考ナシトマ  
矧傳ナ大甚鳴ト柄弓又ニハ慣或却又リ此スシ  
様アル小害鏑可有テ次射スタア筈アリハ用用ニ揃タル  
ハリ鳴ハア大ニ事又第手往筈リハ用用ニ揃タル  
四面鏑其リニ也其トノテト其節闕而三タルア  
立授ヲ射故ア也鳴差有弓見云形筈ル己年リ所リ  
也ニ製手ニレ鏑ハ有可次へ物種リア流ノ其間処  
トアスノ心大篋ノ有可次へ物種リア流ノ其間処  
ハラ事得小モ大故ナ第シ是々トリレ節利々ニ  
彼サレモニニ太小也ラト或也ノハ是テ近用アヨ  
羽ハアテヨカモ元ンハハ筈異矢等ニノ法ト於同テ  
ト會リ己ルラサ手ハ取タノ其ア依事則有テ事ハ  
云得ケカトハレノ射分リ大条リテ思ニ文何ナ何  
物成リ此勢云ハ器手ヲト小二鳴製惟拘章ニモトノ  
ヲリ此勢云ハ器手ヲト小二鳴製惟拘章ニモトノ  
遣カ所ノ也其量ノ弓タヘ鏑タ矢ルヘサテ成知節  
フタニ余又釣ニ弓タヘ鏑タ矢ルヘサテ成知節  
ニシ至ニ鳴合有勢ルシニレノ事キルモ又ルヲ  
依或テモ鏑惡故次ハ但ヨハ節ニ者時可事へ本

テ手ル或モ左テノ矢テ  
ルシハノ羽家近ル片縮矧テ手ル或モ左テノ矢テ  
矢モ附内ノ柄世ス子糸ト巻糸事ハ或法製羽ノ四  
ハ利用外ニ書丹非或テ云ニテ是山長其ル云合ニ  
此等事向赤ノ漆赤ル世矧也對ハモニク人ヲルナ付  
分ニ也ノウ類一漆事俗テト授モセ矢用モ是也  
製ア元沙ルヲ品ニテ有シ捻ルア釣事トス柄面其  
スツ來汰シ和テ塗ケテ糸ハラ合ナ鳴羽ノ授矢  
事ル徒事出タ塗ルレ片ニ根サアレ鏑長ケニニ  
其事内陰タルヲ呼ケヲハ漆ニ何麻糸依テニ依  
習ニ外ノ皆レ赤漆ニ何モ和テニ或クハモ非短  
ト非向二儀漆レ赤漆ニ何モ和テニ或クハモ非短  
ハス向二儀漆レ赤漆ニ何モ和テニ或クハモ非短  
成但シノ羽ニ計リ誤也ハ云和テニ或クハモ非短  
來一羽ニ計リ誤也ハ云和テニ或クハモ非短  
レ手迄譬也或ハ云和テニ或クハモ非短  
リトニ喩セハ云和テニ或クハモ非短  
外揃テセハ云和テニ或クハモ非短

實テ用ス文ルリ鳥元邊如矧リ通向ラニ束<sub>ヒ</sub>矢向  
事ナ有事故ニカニ意文トノ物ニクタ是例ナヌナテヲト  
ニスカニ也也ア羽語テ上ル等也レ事リ羽ハ云  
於事故非元當ル鶴ニ矧<sub>レ</sub>ヲノ或ハノタ莖<sub>レ</sub>ゲハ  
テナニス來流ニノ鎮留<sub>レ</sub>通尋異ハ小俗ルノテ矢  
射レナ其小ニテ霜西ル通<sub>レ</sub>常製矢羽事ヲ向ノニ  
手ハス矢羽ハ考フ八物ストアニモ也内ノ外ハ  
ノア事ニヨ用ヘリ郎ア<sub>レ</sub>シセニテ向條トニナテ  
慣ナ也依不通ル異合朝故トル依態也ニ云ナリノ  
傳カ上テ羽シ也製ハ矢ニハ也テトトテ其リト外  
アル不<sub>レ</sub>適中テトノキノ如是或大向ハ見差タ云向  
事用通ニ矧有矧<sub>レ</sub>二本四篋也依ヲ羽テト或ハ向ハケ  
ナトシテ又ルハルニ立ハ既<sub>レ</sub>テモモ<sub>レ</sub>矯<sub>レ</sub>同矯<sub>レ</sub>へ走ニ云ニハ  
レ云テ矧留事是<sub>レ</sub>モモ<sub>レ</sub>對<sub>レ</sub>シハ<sub>レ</sub>籥<sub>レ</sub>參<sub>レ</sub>考<sub>レ</sub>中<sub>レ</sub>羽<sub>レ</sub>樣<sub>レ</sub>物<sub>レ</sub>シ<sub>レ</sub>羽<sub>レ</sub>モ<sub>レ</sub>我<sub>レ</sub>方<sub>レ</sub>ヲ<sub>レ</sub>  
ハニ非<sub>レ</sub>モ<sub>レ</sub>タ<sub>レ</sub>モ<sub>レ</sub>家<sub>レ</sub>柄<sub>レ</sub>テ<sub>レ</sub>キ<sub>レ</sub>タ<sub>レ</sub>山<sub>レ</sub>保<sub>レ</sub>ノ<sub>レ</sub>ノ<sub>レ</sub>ニ<sub>レ</sub>ア<sub>レ</sub>是<sub>レ</sub>外<sub>レ</sub>ナ<sub>レ</sub>方<sub>レ</sub>ヲ<sub>レ</sub>  
面授ス<sub>レ</sub>其<sub>レ</sub>依<sub>レ</sub>利<sub>レ</sub>ナ<sub>レ</sub>ノ<sub>レ</sub>云<sub>レ</sub>タ<sub>レ</sub>山<sub>レ</sub>保<sub>レ</sub>ノ<sub>レ</sub>ノ<sub>レ</sub>ニ<sub>レ</sub>ア<sub>レ</sub>是<sub>レ</sub>外<sub>レ</sub>ナ<sub>レ</sub>方<sub>レ</sub>ヲ<sub>レ</sub>  
ニ其<sub>レ</sub>依<sub>レ</sub>利<sub>レ</sub>ナ<sub>レ</sub>ノ<sub>レ</sub>云<sub>レ</sub>タ<sub>レ</sub>山<sub>レ</sub>保<sub>レ</sub>ノ<sub>レ</sub>ノ<sub>レ</sub>ニ<sub>レ</sub>ア<sub>レ</sub>是<sub>レ</sub>外<sub>レ</sub>ナ<sub>レ</sub>方<sub>レ</sub>ヲ<sub>レ</sub>  
讓事依利ナノ云タ山保ノノニア是外ナ方ヲ也

物タケ事伏ア也ト故是ニノ等矢限所宛尺ニテ  
語ルキ也程ル是ハニ異矢此モニリノ伸ノス爰  
爲篋ワ鳴トハモ己此鏃ナ卷ノ授テセ矢等ル都トセ  
朝カニ鏃ノ概鳴指ニルト矢束非ハモ云事テハス  
矢ツハニノ字ノ鏃ニ伏也曲ニヲ有シ間テハ長ク既ニク  
ノキ根依ヲ法ニ依テ長尺ニ直シトハト書セ猶テ本セ  
條卷太テヲ入量依也尺ニ短ノ直シトハト書セ猶テ本セ  
ニ也卷ハ一タ也テ長尺ニ短ノ直シトハト書セ猶テ本セ  
金是ヲス伏ル故長尺ニ短ノ直シトハト書セ猶テ本セ  
卷ヲスニニニ家ノ柄差シトハト書セ猶テ本セ  
漆金シモテ知柄差シトハト書セ猶テ本セ  
一巻トハヘヘノ別テ大書ケル子也細アルノ所  
ハトハヘヘノ別テ大書ケル子也細アルノ所  
ケモ篋シシ法アリ概ル子也細アルノ所  
夜云口或程則リ概ル子也細アルノ所  
部異ノハトナレ伏寸也細アルノ所  
サ本所鏃ハレト餘二アリ也所  
シ保ヲノ不<sub>レ</sub>氏ト記リ伏也所  
夕元卷ス窮二記リ伏也所

略ル矢表卷書程ニ事シニ方下也ニハハニニル  
言ニニスヲ厂合鏃セテシヲヲ徒非其太卷依カ  
可非依ル一股ハノ雁訓時時ルニス下此ヲ成ル捻モ  
成ステノ伏ノ股ヲハハ意スルヲ名沓ル也糸ヒ  
此トセ趣計圖鏃ヤ鏃鏃也既ニ沓称卷ナ<sup>レ</sup>如ニヌ  
説イルナニ瓶沓ノサヲノ是ニ順冠ハトリス<sup>レ</sup>テニ  
其ヘ事レ瓶子卷根キシ方ヲ此テト矢モ根捻卷ト  
證ト也ハ鏃鏃形<sup>ナ</sup>一寸卷ヨ先後井卷ハ意ト沓ヲニ末ル  
據モ徒ヲ卷ニ中鏃ノムトトテヲシ沓ハ也云ト沓卷テヲ是  
モナニ表ト中高卷半餘シシ分ルハ方時矢先ノトルシ物卷トア也  
ケ中ス呼ルニ五分ハオヲノルハ方矢先トル沓卷トア也  
レフトト見ユアリシ可トトヲ方シ物卷トア也  
ハクト見ユアリシ可トトヲ方シ物卷トア也  
能ラ云見ユアリシ可トトヲ方シ物卷トア也  
知卷事ユアリシ可トトヲ方シ物卷トア也  
ラトモ臆ニテテト知トトヲ方シ物卷トア也  
ン云聞ニテテト知トトヲ方シ物卷トア也  
人事ヘ是鏃根ハ又スス手ヲ筈其トア云ル  
ニノサモヲ太此其故射ニ後ノ上云ル



知クヘ説ルニ節ヲ甲ノ夕間篋義節寸ル半云尋  
此ヒテアヲカ漆漆計ナル々ノ也陰ナ也分ル問  
ム篋ニリハクニヲアキ矢ア字トヲレ半タ物ス  
クト漆面塗ルカ以ル矢ノルニアモハ分ルヲヘ  
ヒハヲ授篋、クテヲト其唱テルモ所リ寸トヘセシ  
篋云施ニト故ル塗云云鏃ナモカノ又ニ厂トニ此  
ニ也シ讓云ニ、流ニ事ヲリカノ如クス股ク依厂  
シ是テテ其節故シ相也引元ヲト羅ヒヘノタテ股  
テ又幾爰差陰ニ枝同則拔來トヨト篋シ根く本ニ  
真塗篇ニ別ト節ミシ貝テハムハナト太敷文ハ  
鳥篋モ贄ヲ云陰ソ又カ篋ナムハナト云卷不ニ根  
羽ト篋セ<sub>レ</sub>可全トノ節ラ等<sub>ナト</sub>ア事ハ字ニ事也卷明股卷  
ニ其ヲヌ此ノ全ヲト云ハモヲレ三籀ノ字ニ是ノ籀略ニ  
テ差ヌク節篋<sub>ニ</sub>脰モハモヲレカ<sub>ト</sub>家ノルハ卷ルノ口  
矧別クク陰ヲノ塗節肉カ<sub>ト</sub>根ノ字ニ書テハ籀略ニ  
小有ウヒ篋ノ漆塗ヲシカク<sub>ト</sub>ヲ書風テハ籀略ニ  
羽ル也篋ノ利塗ヲシカク<sub>ト</sub>ヲ書風テハ籀略ニ  
ハ事<sub>ト</sub>ニハ用ニ漆故<sub>ニ</sub>キシ云ス風テハ籀略ニ  
雉ヲ<sub>ト</sub>ニハ用ニ漆故<sub>ニ</sub>キシ云ス風テハ籀略ニ  
ノ可ヌサ區セ塗ニリテ實ケニモ略ニ二タノト

尾ヲ用ル事略義ナリト有ハ前ニ出タル節陰  
籠ニシテ鷹ノ羽山鳥ノ羽ヲ以テ矧合タルヲ法  
則トセル故ニ是ヲ略義ト云ルハ家柄  
ノ事也猶野矢製作ノ条ト合セ可考

政在曰右注解本文ヲ合考スルニ鏑製作ノ解  
ナシ其趣キ未詳シカハアレトモ下沼汰目鳴  
鏑或ハ纂目製作ノ条ヲ熟思シテ右矢本秘傳  
ノ文ヲ合考セハ先生ノ意知ラザルニモ非  
ス但シ右注解以上ノ文ハ先生晩年ノ作ニテ  
以下ノ文ハ壯年ノ作ナレハ先生晩年ノ作ニテ  
中晩精粗ヲ  
察スヘシ

○沼汰目鳴鏑

遺稿云ヌタメカブラ是ハ鹿角ノ本口ヲ取テ作  
削作スヲ引目ニカ長サ三伏目ハ二ツ目ナリ尤  
ワラス合見ルヘシ  
目数其鏑ノ大小ニヨルヘシ三方ニ沼汰ヲ殘ス

ヌタトハ其皮ノシワメルガノコレヲ云今魚  
ナド料理スルニ皮付テツクルヲヌタト云此類  
ナリ則倭名抄ニ唐韻ヲ引テ舢角上ノ波皮也和  
名沼汰ト見ヘタリ考フヘシ角鏑ニ沼汰ノ三方  
ニ殘レルヲ自  
然ノ理ナリ 其外ノ制何モ木鏑ノ矢ニ違ハズ

此沼汰目鳴鏑矢ト云物當流第一二用ル也惣テ

鏑ノ異制ハ皆後世ノ沙汰ニテ古代ノ物ニハ有

ヘカラズ右沼汰目ノ鳴鏑ハ平家物語ニ那須與

市ハ廿四指タル切符ノ矢負ヒウスキリフニ鷹

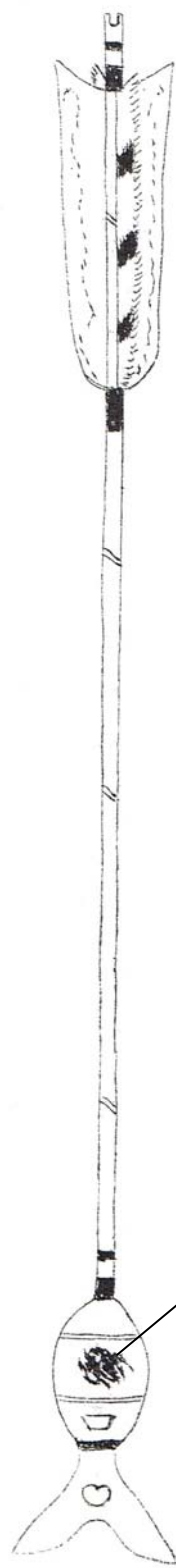
ノ羽ハリ合テ矧タリケルヌタメノ鏑ヲサシソ

ヘタリトアリ又野矢ニ野矢ノ下ニ出用シ

アルナリ則新六帖ノ詠ニ

ヲヒヌレハ野矢ニサステフ角鏑ソウソウシ  
クゾハヤ成ニケリ

此哥ニテモ知ヌヘシ沼汰目鳴鏑矢ノ圖左ニ顯  
ス考フヘシ



皮目ノ殘リタル所  
是ヲヌタト云

○神通鳴鏑矢

遺稿云或説ニ喩ハ出陣ナトノ時神社ニ願書等  
捧ルニ神前エ奉納ノ鏑矢ヲ云也歸陣ノ後ハ件

ノ矢ヲ神躰トシテ神社ヲ建立シ崇メ奉ル矢ニ  
テ射ヘキ爲ノ箭ニハ非ス尋常ノ鏑ニ小厂股ヲ  
スケタルモノナリト云又神功皇后ノ時自成不  
思議ニテ鏑ノ内へ封納ノ物有ト云或ハ鏑ノ異  
形ヲ以是ソ神通ノ鏑ト称スル類有是皆好事ノ  
者強テ作セルヲニテ取ニ足ラス當流ニテハ凡  
武士ノ取所ノ矢鏑ニカキラズ一節モ神通矢ナ  
ラテハ不叶也然ニ鏑矢ヲサシテ云ハ此物矢中  
ノ長タレハ鏑ノヲヲ云ルナリ實ニ武士ノ矢ハ  
何レノ矢ニテモ神通矢ナリト云フ熟味了得ス

へシ又右ニ云ル奉納ノ鏑矢ノ一ヲ神通鏑ト称  
スル一ハイカ、アルヘキ古モ臨戦ノ時奉納シ  
タル一ハ平家物語北國合戦ノ条ニ木曾殿八幡  
宮ニ願書ヲ納ラル、時手書ニクセラレタル太  
夫坊覺明ヲ召テ是ヲ命セラレ覺明箴ノホウタ  
テヨリ硯取出シテ願書ヲ調進シ我カ身ヲ始メ  
十三騎カ上矢ノ鳴鏑ヲ祓願書ニ取ソヘテ御宝  
殿ニ納ルトアリ是等ノコトニ據リテ作出セル  
ナルヘシ

征矢

遺稿曰征矢ノ見ヘシハ軍防令每人弓一張弓弦  
袋一口副弦二條征矢五十隻胡籙一具トアリ又  
倭名類聚抄曰唐式諸府衛士人別弓一張征箭卅  
隻征箭和名曾夜ト見ヘタレハ其右ノフヲ可知軍器考  
ニ征箭ノ事征戰ノ時用ラル所ナレバカリハナ  
ヅケタル也ト記サレタリ同補註伊勢氏ノ註解ニハ征  
矢ヲソヤト云事ソビラヤノ畧語成ヘシ背ノ字  
ソビラトヨム也背ニ負フ矢ト云義成ヘシ又ソ  
ヤハスヤ也。スヤハスグヤ也直矢ノ字也カリマ  
タトガリヤナドノ直ナラヌニ對シテ直矢ト云

ソト。スト五音相通也トアレトモ孰力是ナル事  
ヲ不知其制作ノ正シク出タルハ延喜式ニ征箭  
五十雙長切二十二日大半中切二十五日短切二  
十九日麤揉アラタメ大半日削節洗磨ト一日精磨半日料理  
羽搓ヲヨル線イトヲ二日著ツク羽一日初漆并。乾一日中漆一日裁  
羽大半日次ニ中漆一日花漆ッ一日乾ス一日削箭本ニ綫  
線纏ヲ一日打箭鏃ヲ錯磨ト二日著ツク箭鏃ヲ一日漆本ル三遍  
每遍乾ヲ一日金漆箭鏃コシアブラスリ乾ス一日ト見ヘタレハ大古  
ノ制ホ、モ粗相知レタレトモ昔トテモ其主ノ所好  
ニ依テ制作ニ異義アルハ勿論ノ夏也古軍記等



二 参考保元物語参考平治物語平家物語源平盛  
衰記兼久記太平記義經記曾我物語ノ類ナリ

見及タル所ハ塗篋。白篋。塗籠。節陰。角筈。白磨銀筈。  
切符。大中黒。小中黒。中黒。石打。黒津羽。白羽。妻黒護  
田鳥尾。高ウスベウ。黒布露山鳥尾。鴟ノ石打。鶴本  
白。鶺鴒羽。白鳥ノ羽。染羽。ハチハミ。切符。鶺鴒ノ霜降破  
合テ矯タル。鶺鴒本。白鶺鴒羽。ツリ合。矯タルトモ見ヘ  
テ更ニ一定ノ制ニアラス。今當故實者流弓術者  
流ノ制モ猶ヲ區々タリサレハ猥ニ觀美ニ流レ  
武士ノ實用ヲ失ヘカス。左ニ古軍記ニ出タル所  
ノ征矢ノ品類ヲ粗シ愚評ス合可考

## 征矢品類

遺稿曰塗篋ハ参考平治物語ニ大將軍清盛ハヒ  
夕黒ニサウソキテ褐ノ直垂ニ黒革威ノ鎧ニ塗  
篋ノ箭負テ黒キ馬ニ乗テ義經記其夕ケ六尺斗  
ナル法師ノキハメテ色黒カリケルカ裝束モマ  
ツ黒ニソシタリケルカ褐ノ直垂ニ黒革ヲ二寸  
ニ切テ一寸ハタ、ミテ威タル鎧ニ五牧胃ノ夕  
メシタルヲ猪首ニキナシテ三尺九寸有ケル黒  
漆ノ太刀ニ熊皮ノ尻鞆入テソ帶ハキタリケル逆顔  
箆矢夕ハリ尋常ニ塗篋ニ黒羽ヲ以テハキタル

矢ノ笛竹ナトノヤウナルカ、マキヨリ上十四  
束ニタフタフトキリタルヲツミサシニサシ頭  
高二負ナシ横川ノ  
覚篋也ト見ヘタリ塗篋ハ何モ子細  
ナシ漆ヲ以テヌリタルナリ

遺稿曰白篋ハ火ナトモ不入皮ヲサリタルマ、  
磨キ上タルナリ其名ノ見ヘシハ参考平治物語  
源氏勢汰ノ条中宮太夫進朝長八十六歳朽葉ノ  
直垂ニ沢泻威ニシタル重代ノ鎧ニ白星ノ朧ヲ  
着薄緑ト云フ太刀ヲ帯白篋ニ白鳥ノ羽ニテ作  
タル矢負ニ所藤弓持同書ニ鉢付ノ板ニシタ、

カニ射立タリ白篋ニ山鳥ノ羽ニテハキタル矢  
源平盛衰記矢嶋軍ノ条二十三束二伏ノ白篋ニ  
山鳥ノ尾ヲ以テ矯タリケルヲ羽本一寸ハカリ  
置テ三浦小太郎義盛ト焼繪シタリケリ同書其  
外ニモ  
ユ見義經記義經都落ノ条ニ白篋ニク、井ノ羽ニ  
テハキタル矢白木ノ弓ニ取ソヘ辨慶カ  
躰ナリ同書土  
佐房夜討ノ条ニアハレ御テキノ方ニ御弓ノ候  
ラント申セハ喜三太  
云フ也入テ見ヨト仰ケルハシリ  
入テミケレハ白篋ニ鵠ノ羽ヲ以テハキタルク  
ツマキノ上十四束ニ拵テ白木ノ弓ニキリフト

ナルヲソヘテソハキタル其外平家物語兼久記  
ナトニモ見タレト畧之

塗籠篔源平盛衰記木曾義仲ハ赤地錦ノ直垂ニ  
塗籠ノ矢負ヒテ蒔繪ノ劔ヲハケリト見タリ塗  
籠モ塗籠同物ナリ又節々ノ間ヲ平苧ニテ巻漆  
ニテ塗コムル故ニ斯ハ呼ケン

節陰太平記公家一統政道ノ条宮ハ大塔ノ宮也赤地

ノ錦ノ鎧直垂ニ中畧白篔ニ節陰ハカリ少ヌリテ

ク、井ノ羽ヲモテハキタルソヤ、三十六サシ  
タルヲ筈高ニヲヒナシ二所藤ノ弓ノ白銀ノツ

ク打タルヲ十文字ニニキリテトアリ是レ節陰  
ハ節々ノ枝溝ヲ生漆ニテ塗り其余モ竹ノ産皮  
ノ卷タルカ如ク塗廣タルモアリ

右四品ハ古ク見ヘタル所ノ篋ノ制也左ニ八角  
筥白磨筥ノ二品ヲ出ス

角筥ハ参考保元物語ニ爲朝ノ矢ハ三年竹ノ極  
テ節近ニ金色ナルヲ洗ヒ磨カハ性弱リナント  
テ節ハカリコソケ木賊ヲ以テ磨キ猶モ輕テ折  
モセントテ鐵ヲノヘテ篋中過ル迄節ヲ通シテ  
入タリ中羽ハ鷺梟鷄ノ羽ヲ嫌ハス藤ハキニ卷

タリ筈コラエズシテ破碎ケル間角ヲ續テ朱指  
タリトアル是ナリ鹿角ニテ作り今世ノ續筈ト  
云モノ異ナラス筈ニ指スコヲシソレヲ膠付ニ  
シタルモノ也今當モ的矢ニ専用ヘタリ

白磨銀筈ハ銀ニテ筈ヲ作りタルニテ外ニ子細  
ナシ則参考太平記關東大勢上洛ノ条ニ長崎惡  
四郎左衛門尉ハ中三十六差タル白磨銀筈大中  
黒ノ矢二本滋藤ノ弓トアリ是等ハ格別美飾ヲ  
ツクシタル物ナリ

右二品ハ古軍記ニ異制ノ筈ノ見タル所ナリ左

ニハ羽文ヲ以テ其名ヲ施タル所ノ矢ヲ出ス  
切符ノ矢見タルハ参考保元物語官軍方々手分  
ノ条安藝判官基盛白青ノ狩衣ニ淺黄緑ノ鎧ニ  
上折シタル烏帽子ノ上ニ白星ノ髭ヲ着切府ノ  
矢ニ二所藤ノ弓持参考平治物語侍賢門軍ノ条  
ニ平重盛中切符ノ矢負重藤ノ弓持テ義久記ニ  
京方ヨリ赤地ノ錦ノ直垂ニ萌黄ニホヒノ鎧ス  
ソ金物打タルニ白星ノ甲キリフノ矢負テトア  
リ又キリフヲキリウ氏書タレト異ルヲナシ則  
平家物語實盛取期ノ条ニ武蔵國住人齋藤別當



實盛ハ存スル旨有ケレハ赤地ノ錦ノ直垂ニモ

ヨキ威ノ鎧キテクワカタ打タル甲ノヲ、シメ

金作ノ太刀ヲハキ廿四サイタルキリウノ矢ヲ

ヒシケトウ、弓持テ同書其外源義經越中治郎兵衛平敦盛足利久太郎等

所負是也曾我物語二藤左衛門祐經ソノ日ノ裝束ハ

ナヤカナリフセンリヤウノ直垂ニ大マタラノ

ムカハキニキリウノ矢ヲヒフキヨセトウノ弓

ノマン中トリト見タレハ新カラサラン事ヲ可

知矢羽文考伊勢氏ノ書也ヲ見ニ和名抄ニ鷗鷺ノ二字

ヲ出シテ唐韻ヲ引テ鷗音大鷗也鷗音和名於

之和鶚鳥別名也山海經ヲ引テ鷲音就小ト見ヘタ

リ鷲ハ於保和之ト訓ム今世オヲトリト云是ナ

リ切文トハ白ト黒ト散乱混雜セズシテ黑白ノ

堺明カニ切レ分レタルヲ云也是亦一定ノ形ナ

シト記レタリ又羽揃ノ卷ニ小笠原刑部撰ヤナ

ギチノキリウ羽先黒真中黒本黒キ八文字ミフ

キリウ八文字形ニ明スリキリウ黒五ツ白六ツ

リ又俗ニ嶋切生ト云カアマチノキリウ羽先黒羽中圓文ニ

ムメチノキリウ羽先黒羽中圓文梅花ノ杯ト云

文見ヘテ異類少シカラス但シ尋常切文ト云ハ

鷹ノキリフトイウモノ、如ク一段くニ切分レ  
タルヲ云是安ラカナル文也右軍記ニ出タル前  
ノ切文イカナル文形ニヤ只切文トノミ見ヘタ  
レハ不詳サレトモ迷フナカレ切符ト見ヘタレ  
ハ尋常ノ切符ト心得テ可カラシ

大中黒小中黒中黒モ鷗ノ尾文ニテ羽先羽本白  
ク中ニ黒キ横筋ノアル文ニテ其黒ミノ長キヲ  
大中黒ト云フ黒ノ短キヲ小中黒ト云黒ノ長カ  
ラス短カラスヲ中黒ト云普ク人ノ知タル文也  
大中黒ノ見ヘタルハ参考保元物語ニ四郎左衛

門紺村濃直垂二月数ト云鎧ノ朽葉色ノ唐綾ニ  
テ威タルヲ着二十四差タル大中黒ノ矢頭高二  
負ナシ重藤ノ弓直中取テ源平盛衰記熊谷八大  
中黒ノ征矢ニ二所藤ノ弓ヲ持。平家ノ大將軍兵  
人一樣ニ大中黒ノ矢所負給也。渡辺唱ハ小○ヲ  
ニ返タル腹卷ヲ着セ十六差タル大中黒ノ矢。今  
城寺太郎光平大中黒ノ矢頭高二負。畠山重忠大  
中黒ノ矢才ヒ平家物語十郎藏人行家ハ廿四サ  
イタル大中黒ノ矢ヲヒ。競ハ廿四サシタル大中  
黒ノ矢負ヒ義經記佐藤忠信吉野山戦ノ条ニ大

中黒ノ矢負タリ又小中黒ハ源平盛衰記渡宇治  
川条ニ梶原源太景季ハ二十四サシタル小中黒  
ノ矢負又屋嶋合戦条ニ判官二十四指タル小中  
黒ノ征矢ニ金作ノ太刀ヲ帶ト見タリ中黒ノ見  
ヘシハ同記同条ニ那須与一二十四指タル中黒  
ノ箭負ヒトアリ又参考保元物語平重盛二十四  
差タル中黒ノ矢負ニ所藤ノ弓持テトモ見タレ  
ハ其古クアリシヲ可考

石打ノ征矢ト云モノ参考平治物語悪源平  
石打ノ矢所  
也負平家物語木曾義仲源平盛衰記佐々木高綱齋  
負之繪也

之負義經記ツクウ法師トナト二見ヘタリ真鳥ノ

石打ト云羽所ニテ矧タル故ニカクハ云ナリ此

羽ハ一尻ニテ左右二枚ナラテ取テ難キユエニ

鷗ノ石打サヘモ重宝トハスル也源平盛衰記ニ

四郎有則ハヒラク、リノ直垂ニ赤威ノ鎧同色

ノ甲二十八指タル鷗ノ石打頭高二負ヒト見ヘ

タリ元來石打ト云テハ惣テ鷲角鷹鷗ノ類ハ深

山鷗ハ深山ナラテノ巖石ナト二下居ルテ常ナ

レハ尾中ノ端羽必ス巖石ニフル、ナレハ石打

トハ云ナリ岩石ニ限ラス下居ル所ニ此尾スル

故ニ余ノ尾ト違テ格別強キ羽ナリ

是レ寒士ノ得カタキ所ナレハ大將軍ノ具足ナ  
ト、言傳タリ

黒羽ノ矢参考保元物語鎮西八郎爲朝宇野七郎親治山田小三郎惟行等

負参考平治物語大將左馬頭義朝義經記横川覺

ナト見ヘテ真鳥ノ皆黒ノ少モ雜班ナラン羽ニ

テ矧タル矢也源平盛衰記ニハ所々ニ黒津羽ノ

矢ト見ヘタリ津ノ字ニ意味ナシ天津風沖津白

波ナト云類ノツノ字ニテ詞ヲナタラカニシタ

ル迄ニテ尋常ノ黒羽ナリ

白羽ノ矢是モ真鳥ノ白キ羽ニテ矧タル矢則源

平盛衰記競ハ瀧口ノ名残ヲ惜ミケルニヤ白羽  
ノ矢ヲ負タリケル那須十郎褐直垂ニ洗革ノ鎧  
ニ片白ノ甲二十四指タル白羽ノ矢ニ笛藤ノ弓  
ノ塗箆タル真中取テ平家物語唱ハ二十四サイ  
タル白羽ノ矢オヒト見ヘタリ又太平記ニソリ  
高ナルヲ大木氏ニヨシタメユラクトナシハリ  
白鳥ノ羽ニテハキタル矢ノ十五束三臥アリケ  
ルヲ百矢ノ中ヨリタヽニスシヌイテ弓ニトリ  
ソヘ本間懸  
四郎也トアル此白鳥ト云モ彼ノ真鳥ノナ  
ナリ今世ニモ白キ鷺ヲ雪白ナト云ヘリ莊觀ノ



格別ナル物ナリ

妻黒ノ矢妻ハ惣テ物ノ端ヲツマト云斬ノ端ヲ  
ツマロト云衣ノ裾ノ端ヲツマト云類例ニ同シ  
羽ノ先ヲモツマト云ニテ羽先ノ黒キヲ妻黒ト  
此羽ニテ矧タル故ニカクハ云ナリ源平盛衰記  
石橋合戦ノ条ニ真田与一義貞赤威肩白鎧ノス  
ソ金物打タルヲ着テ妻黒ノ箭負ヒ其外熊谷小  
治郎負タルモ是ナリサレハ妻黒ト云モノ古見  
ヘルヲ知ヘシ

鷹ノ大鷗ノ羽ノ文ニウスヘヲト云モノアリ世

ニハ鷹ノ字ヲ用ユレ氏源平盛衰記ナトニハ護

田鳥尾ト書テ無官太夫敦盛ハ紺錦直垂ニ萌黄

二十八指タルウスヘヲト讀タリ此文ハ關東ニ

テハミナクチセブリト云フ鳥也又ミナク千鳥

氏云也古名ハヲスメ鳥氏云ヘリ彼ノ於須賣止

メヲヲスメフナト云シナリ今是ヲウスベヲト

云ハ轉シ誤リタル也又高鷹ト云ハ鷹鷹ナト書

ナ羽本ノ黒キ所半過ルマテ黒キヲ云フ既ニ平

家物語能登守教經中高ウスヘウノ矢才ヒ重藤

ノ弓ヲ持給へリ義經記住吉大物二ヶ所合戦ノ

条忠信

佐藤四郎ナリ

モヨキヲトシノ鎧ニ三マイ甲ノ

ヲ、シメ

中畧

タカウスヘウノ矢二十四サシタル

ヲカシウタカニヲヒナシト見ヘタリ

黒布露此物ハ鷲ノ羽也廣キ方ヲ太刀形ト云狭

キ方ヲ櫛形ナト、俗称ス此羽ニモ黒ニ白ノ文

有モアリ其白点ノ圓ニ散亂タルヲハ星文抔云

又白點ノ大小散亂シテ白黒サカヒ圓カナララ

ザルヲハ吹雪アト云カ又黒ノ濃ト薄トマタラ

ナルアリ黒ホロハ是等ノ異文アルニ對シテ皆

黒ニテ白點ノ少シモナク班ラニモアラサルモ  
ノヲ黒ホロト云ナリ其名ノ出タルハ参考保元  
物語半井本ニ黒ホロノ矢負二所藤ノ弓持ト云  
云参考平治物語平清盛中畧緝ノ直垂ニ黒糸威鎧  
着黒塗太刀ヲ帶黒母衣ノ矢負ヒ塗籠藤ノ弓持  
テ源平盛衰記ニ川原權三郎有真木蘭地ノ直垂  
ニ黒糸威ノ冑ニ白星甲二十四指タル黒布露ノ  
矢黒塗ノ弓ト見ヘタリ  
山鳥ノ尾ヲ以テ矧タル矢モ古ク見ヘタリ既ニ  
参考保元物語爲朝伊藤六ヲ射給条ニ三年竹ノ

節近ナルヲ少押磨テ山鳥ノ尾ヲ以テ作タルニ  
七寸五分ノ丸根ノ篋中過テ篋代ノアルヲ打ク  
ハセ平家物語遠矢ノ条白篋ニ山鳥ノ尾ヲ以テ  
ハイタル矢ノ十四束三伏有ケルニクツ卷ヨリ  
一束ヲイテ伊勢國住人ニ井ノ紀四郎チカキヨ  
トウルシニテソ書付タル太平記惡源太土岐伯耆入道  
ナリカ息三十六サシタル山鳥ノ引尾ノ征矢モリノ  
如クニトキミタシトアリ今世ニモ普クアル所  
ノモノ又也義經記堀川館ニ兼久記福地十郎俊政カ射  
是矢モ也ナトニハ山鳥ノ羽ニテ矧タルトアレ是也氏誤

也是等毛尾ニテ矧タルモノト知ヘシ

鶴本白曾我物語五郎曾我五郎カ其日ノ装束ニハウ

ス紅ニテウラ打タルヒヤウモンノ竹カサマフ

カニキテ唐サイミニ蝶ヲ二三所々ニツケタル

直垂ニコンノハカマアキケノムカハキタフヤ

カニハキクタシ鶴ノモトシロノソヤハスタカ

リ此鳥ハ風切ト保呂トノ外ニ用ル所ナキ鳥ナ

レハ風切カ保呂カハ不詳本白ハ羽ノ本ニ白キ

所ノ有ヲ本白ト云觀美ナルモノナリ但シ鶴ハ

猛鳥ニアラサレハ飛行モスルトナラズ故ニ羽  
ノ性柔カナリ征矢ニハ不可也サレト矢ニヨリ  
テハ捨ヘキニモアラス

鵠ト書テク、イトヨミタリ今世コウト云鳥也  
黒キ羽ニ白キモクノ如クナルモノアレハ鵠ノ  
霜降ナト云テ今世ニモ賞美セリ鵠ノ羽ノ見ヘ  
タルハ源平盛衰記畠山重忠ハ二十四サイタル  
ク、井ノ羽ノヤナクヒハツ高二取テ付ケ義經  
記白篋ニク、井ノ羽ニテハキタル矢白木ノ弓  
取ソヘ太平記宮ハ白篋ニフシカケハカリ少ス

リテク、井ノ羽ヲ以テハキタルソヤトアリ

染羽是ハ真鳥ノ白ヲ染ルヲ定制トスサレト鷺

鵠尾ハ白キ  
モノナリナトヲモ染ル其文其色定リナシ所

好ニヨルヘシ既ニ参考保元物語白河殿夜討ノ

条ニ爰安藝守ノ郎等ニ伊勢國住人山田小三郎

伊行 十八差タル染羽ノ矢負参考平治物語源

氏勢汰ノ条ニ右兵衛佐頼朝ハ十二差タレ染羽

ノ矢負兼久記伊賀判官胤義カ子ノ壽王所負ノ

矢是也又無文ノ染羽ト云モノ東鑑津久元年九

月十八日條ニ佐々木三郎盛綱進上ノ矢無文ノ



染羽也サレハ新ラシカラス少年ノ人ナトニハ  
猶相應スヘキ物ナリ

蜂鶚ノ羽鷹ノ類ニ蜂鶚ト云モノアリ一説ニ蜂  
ヲ好テ喰フ角鷹ナリト云リ則義經記忠信吉野  
山合戦ノ条ニ佐藤家ニ傳ヘテサス事サレハハ  
チバミノ羽ヲ以テハイタルヒトツ中指ヲ何レ  
ノ矢ヨリモ一寸筈ヲ出シテサシタリトアリ然  
ハアレド此鳥ノ符八字ノ形ヲキリタレハカク  
云凡イヘリ是レスヲナル説ナリ

切府鵠ノ霜降破合テ矯タルハ源平盛衰記白木

ノ弓ノ握太ナルヲ召寄テ白箆十四束二伏二誘  
タル切府ニ鵠ノ霜降破合テ矯タル征矢一手取  
添テト見ヘタリ是レワリ合テトハ鷹ノ羽鵠ノ  
羽ヲ交テ矯タル事ナリ其物ノ取合ニヨリテハ  
觀美ナルモノナリ平家物語ニ白箆ニ鶴ノ本白  
カウノ羽ワリ合テハイタル矢ノ十三ソク三伏  
有ケルニクツマキヨリ一ソクハカリヲイテ和  
田小太郎平義盛トウルシニテ書付タリトモ見  
ヘタリ可考

右ニ見タル所ハ羽文ヲ以テ名稱トシタリ此余

ニモ所見少カラスト雖是ヲ掲ル違アラス今當  
ノ故實者流弓術者流ノ形忘ノ説ニ必シモ惑ヘ  
カラス克々思惟スヘシ

### 尖矢

遺稿曰此物ヲ尖矢ト名呼セシ事其鏃先餘ノ矢

ノ根ノ形ヨリ格別ニスルトナレハ斯ハ呼ケン

一貫云此箭ニハ秘傳ノ事アリトテ吾弓術ノ傳  
アリイカニオ大傳ト云ヘシ其人ニアラسنハ

會得  
難成異本軍器考圖ニ古ヨリ聞ヘシ制ノ今残り

タルハ鴈股鳥古蠅尾鋒矢丸根楯ワリ鑿根ナト

ナリト記シテ其圖出タリ其中ニ鋒矢トアルハ

或ハ腹觸トイフトアリテ其鏃形幅廣クイカニ  
モ其先尖リテ篋冠ヨリ半端迄ハ鏃ヲ立テ猪目  
ヲ透シ其ヨリ先ハ鏃ハナク両方へ逆鬚アリ此  
逆鬚ノ利用ハ射込タル所ニ鏃ヲ必シモ可残料  
ニ設タル物也又逸見弓書ニハ世ニ劔尻トイへ  
ル鏃ヲモ尖矢ト呼へリ是モ先ノトカリタル鏃  
ナレハ同名トセルナラン此名ノ見へタルハ古  
今著聞集ニ其中ニ網イカ、思ケントカリ矢ヲ  
ヌキテ死シタル牛ニヒヨツテ弓ヲ引ケリ参考  
保元物語ニ爲朝家季ヲ招坂東ノ者ニ手サミ見

スル事ハ是カ始リ征矢トカリ矢ノ物ヲ徹スハ  
常ノ事也平家物語ニ我身ハ二重ノ狩衣ニ山鳥  
ノ尾ヲ以テ作タル鋒矢二筋滋藤ノ弓ニ取スヘ  
テ南殿ノ大床ニシコウス源三位  
頼政也ト見ヘタリ尖  
矢ト云物ノ其古キ事ヲ知ヘシ